

【 4 】

氏 名	佐々木 高明
	さ さ き こう めい
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 57 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	焼畑農業の比較地理学的研究

論文調査委員 (主 査) 教授 織田武雄 教授 池田義祐 教授 有光教一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は東南アジアを主とする熱帯地域およびわが国の焼畑農業の特質を実証的な研究によって明らかにし、それぞれの地域的特色を比較、検討することによって、焼畑農業についての総合的な比較地理学的研究を試みたものであり、論文の構成は序章と本論3部より成る。

熱帯農業とは、森林・原野において、樹林或いは叢林を伐採・焼却して耕地を造成し、一定の短期間作物の栽培を行なったのち、耕作を放棄して耕地を移動せしめる最も原始的・粗放的な農業であり、今日でも、熱帯から温帯にかけての後進地域に広く分布している。しかし焼畑農業が地理学・人類学・農学などの諸分野において注目され、その研究に大きな進展がみられるようになったのは、主として第二次大戦後、世界の後進地域における地域調査の盛行にともなうものである。したがって、これらの研究はなお特定の焼畑農耕民族や農耕形態についてのモノグラフの形をとるものが多いが、著者は序章において、世界の焼畑農業に関する文献を広く渉猟して、農業起源論の立場と文化生態学的な視点から、焼畑農業を熱帯林地帯のイモ類を基幹作物とする「根菜型」、およびサバンナ地帯の雑穀類を基幹作物とする「雑穀型」の2大類型に分類している。

第1部「熱帯焼畑農業の比較研究」は4章より成る。第1章では、民族構成も作物構成も比較的単純な南アメリカの焼畑農業をとりあげ、南アメリカでは、アマゾン熱帯林地帯を中心に、マニオクを主作物とする「根菜型」が分布するのに対して、その周辺にはトウモロコシを主作物とする「雑穀型」がみられることを明らかにし、また焼畑農耕民の村落構造としては、一般に大家族乃至は lineage などの社会的・経済的機能が顕著であることを論じている。次いで第2章では、作物構成と輪作形態を基準にして、東南アジアの焼畑農業の地域類型を設定している。東南アジアでは焼畑作物に陸稲が広く導入されているため、マライシア島嶼群の熱帯林地帯では「陸稲・根菜型」がみられるのに対して、インドシナ山地では「陸稲型」、西南シナからビルマの山地では「陸稲・雑穀型」、インド半島では「雑穀型」の焼畑農業が営まれる。これらの東南アジアの焼畑地域では、耕作期間2年、休閑期間8～15年を通例とするが、耕地の土壌

流出と雑草類の侵入が、耕作期間の長さを規定する主な要因とみなしている。また著者は焼畑地域の人口支持力を測定し、1 Km²あたり25~30人を限度とみなしているが、近年人口増加にともなって休閒期間が短縮され、そのため overcultivation によって耕地の荒廃化をまねく傾向がみられるという。

第3章では焼畑農耕民の村落形態と構造について論じ、南アメリカのような単純な lineage community は存在しないにしても、東南アジアの焼畑村落の基本型は、人口支持力が少ないために10~30戸程度の Weiler 型の小村であり、焼畑経営の主体となる世帯を単位に分節構造を有するものが多いことを指摘している。なお第4章では、南アメリカのマニオク、アフリカのヤムイモ、オセアニアのタロイモ栽培の事例と比較して、東南アジアの「根菜型」焼畑農業の特色を考察し、またわが国の焼畑農業の一部にみられるサトイモなどのイモ類の栽培が、系譜的には東南アジアのそれに連なることを想定している。

第2部「わが国の焼畑農業の研究」は、著者の焼畑研究の中心をなすのであり、5章より成る。わが国においても、焼畑農業は水田や常畑耕地に乏しい山村地域に広く残存しているが、これまで全国的な観点からの焼畑研究はみられなかった。したがって著者はまず第1・2章において、1950年の農業センサスなどの資料を用いて全国の焼畑分布を克明に追求して、本州では北上山地と東北地方から山陰地方にかけての裏日本側の山地、および四国と九州の山地に焼畑集中地域が存することを明らかにし、また山村地域における労働力の流出の著しい今日では、焼畑をなお主要な生産手段とする四国・九州山地以外の焼畑地域では、焼畑耕地は急激に減少し、わが国の焼畑農業がすでに衰滅しつつあるものと論ずる。次に第3章では、わが国の焼畑に栽培される作物の種類とその作物学的性格を検討し、強酸性土壌においても高い収量をあげ得るアワ・ヒエ・ソバと窒素固定能力の大なるダイズ・アズキの5作物の作付率が極めて高く、わが国の焼畑農業においては、これら5作物を基幹作物とする輪作形態の伝統的な「主穀生産型」と、その変容型として、ミツマタなどの商品作物の導入による「商品作物栽培型」および植林の地拵えのための苗木栽培の「林業前作農業型」の3類型が存することを論証する。

さらに第4章では、各地域の焼畑にみられる経営形態の地域的特色を解明するために、著者が全国10数ヶ所の焼畑地域において探訪した資料を基礎にして考察し、わが国の焼畑農業について次の5地域類型を設定している。即ち(1)北上山地を中心に、ダイズ・アワを主作物とし、耕起・畝立・施肥をとまなう集約的経営が営まれ、開拓前線における耕地開発の伝統を伝える「アラキ型」(2)出羽・上越山地にみられるソバ栽培を主とし、経営規模が小さく、水田地帯の補助耕地的性格を示す「カノ型」(3)飛越濃山地および赤石・丹沢山地に分布し、雑穀・豆類を主作物とし、出作りを伴う典型的な雑穀型の「ナギハタ型」。(4)四国・九州山地に行なわれ、雑穀類のほかに、イモ類・ムギ類の栽培も含む多様な作物構成を有し、経営規模も大なる「コバ型」で、四国山地では、商品作物としてミツマタが栽培される。(5)八丈島や薩南諸島、沖縄にみられるイモ類を主作物とする典型的な「根菜型」。

以上にみられるように、わが国の焼畑農業は東南アジアの「雑穀型」に、一部は「根菜型」の系統が加わったものと考えられるが、第5章では著者は結論として、わが国の焼畑農業経営方式の全般的な特色を、焼畑造成技術、作物管理と収穫法、焼畑の耕作・休閒期間、および経営規模などの面から総括し、自給的な焼畑農業が、より生産性の高い林野利用形態の進出によって衰退せざるを得ないのは、焼畑農業の労働生産性の低さと、それを生み出す土地利用形態の粗放性にあると論証している。

また第3部「事例研究」は著者の焼畑研究の基礎となった現地調査のモノグラフを収録したものである。第一章はインド北部のドラヴィダ系のPahari族による典型的な「雑穀型」焼畑農業の農耕技術、第2・3章は九州山地中部の僻地山村五木村梶原部落における「コバ型」焼畑の経営方式と山村社会の構造についての詳細な報告であり、第4章但馬山地の焼畑経営が、商品作物杞柳の栽培によって生じた変容過程の記録である。

論文審査の結果の要旨

焼畑農業は現在でも東南アジア・南アメリカ・アフリカなどの熱帯地域を中心に、世界の後進地帯において広く営まれている原始的・粗放的な農業であるが、世界の焼畑農業に関する地理学的研究はまだ極めて限られている。従って著者は地理学ばかりでなく、文化人類学・農業発達史などの研究成果も摂取して焼畑農業についてのいくつかの注目すべき新しい見解を示している。ことに著者は焼畑農業を大きく「雑穀型」と「根菜型」とに類別しているが、栽培植物の原産地に関して、コムギ・オオムギなどのムギ類が西アジアを中心とする乾地農業に起源するのに対して、雑穀類や根菜類の栽培植物の多くが、熱帯林地帯かサバンナ地帯に起源すると考えられている点からみても、著者の見解は蓋し妥当なものといなされる。

またわが国の焼畑農業については、これまで焼畑農業の耕作方法などについての部分的研究はみられたが、著者はこれを全国的な観点から総合的に把握して地域的類型を設定し、また各地域の焼畑の輪作形態や経営方式を現地調査によって詳細に比較・検討して、わが国の焼畑農業を系統づけた業績は、高く評価されねばならない。

ただ本論文においては、アフリカに関する資料が入手し難かったためか、アフリカの焼畑農業についての記載が少なく、また古来わが国と文化の交流が最も密接であった朝鮮の焼畑農業「火田」とわが国の焼畑農業との関係について触れるところがないなど、著者の今後の研究に俟つ問題も多く残されている。しかし著者が多年にわたり、インドやわが国の隔絶山村において、焼畑農業の実態調査を行なった努力は誠に多とすべきであり、また本論文によって、わが国の焼畑農業の研究がはじめて体系づけられたと言っても過言でない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。